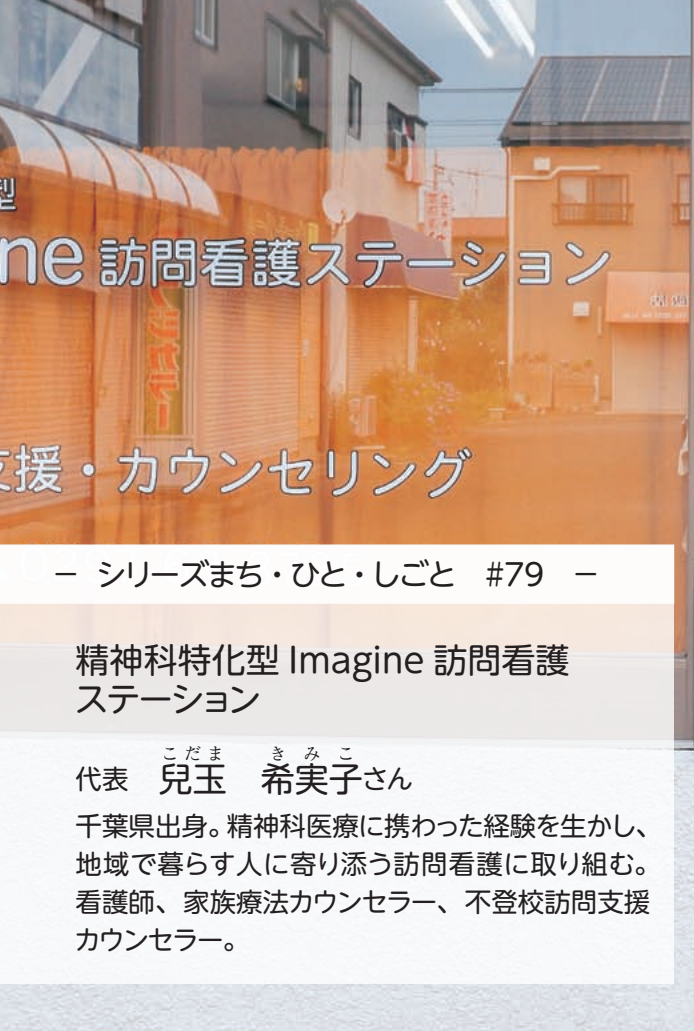




— シリーズまち・ひと・しごと #79 —

精神科特化型 Imagine 訪問看護ステーション

代表 ^{こだま} 児玉 ^{きみこ} 希実子さん

千葉県出身。精神科医療に携わった経験を生かし、地域で暮らす人に寄り添う訪問看護に取り組む。看護師、家族療法カウンセラー、不登校訪問支援カウンセラー。

利根ニュータウン商店会の一角にある「精神科特化型 Imagine 訪問看護ステーション」ここでは、心の不調を抱える方が住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、看護師が自宅を訪問し、一人ひとりに寄り添った支援を行なっています。今回は、代表の児玉希実子さんに、看護師を志したきっかけや起業までの道のり、そして精神科特化型訪問看護に込める思いについてお話を伺いました。

看護師を目指したきっかけを教えてください。

子どもの頃から本を読むことが好きで、病気と闘う子どもやその家族の体験を綴った闘病記を夢中になって読んでいました。テレビでも、病気と向き合う人を紹介する番組をよく見ていて、「こういう人たちに关わる仕事したい」と漠然と思っていました。

高校卒業後は別の夢を追いかけていましたが、25歳の時にその夢を諦めました。改めて自分は何がしたいのかを考えたとき、子どもの頃から変わらず心にあった「誰かの力になりたい」という思いが強くなり、看護師の道を選びました。

子育てをしながら資格取得をするのは決して楽ではなく、子どもたちにはたくさん我慢をさせてしまったと思います。それでも、家族に支えられながら歩んで

きた経験があったからこそ、利用者さんやご家族の気持ちにも深く寄り添えるようになったと感じています。

起業を決意したきっかけは何ですか。

看護師として精神科急性期病棟で働く中で、退院して元気になったはずなのに、再び入院してくる患者さんを何人も見てきました。「病院では元気になれるのに、自宅へ戻るとまた調子を崩してしまう。退院した後も安心して暮らせる環境があれば、この人たちはもっと穏やかに生活できるのではないか」そんな思いが、少しずつ強くなってきました。

いつしか、「病院の中だけではなく、住み慣れた地域で暮らす人を支える仕事したい」と考えるようになり、将来はグループホームをつくりたいという夢を持つようになりました。

しかし、夢はあっても、なかなか最初の一步を踏み出せませんでした。そんな私の背中を押してくれたのが、当時大学生だった娘の何気ない一言でした。「それじゃ一生やらないよ。まずやってみたら」その言葉を聞いた瞬間、「本当にそうだ」と思いました。完璧に準備が整うのを待っていたら、きっと何も始まらない。覚悟を決め、見切り発車ではありましたが、起業への一步を踏み出しました。